

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第7回新潟胆膵研究会

日 時 平成18年9月16日(土)  
午後2時～7時  
場 所 ホテルイタリア軒  
3F サンマルコ

## Session I 『肝・胆道』

## 1 大腸癌肝転移における肝切離マージンの意義

若井 俊文・白井 良夫・Vladimir A. Valera  
坂田 純・金子 和弘・永橋 昌幸  
滝沢 一泰・Korita Pavel・丸山 聡  
谷 達夫・飯合 恒夫・黒崎 功  
島山 勝義・味岡 洋一\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野  
同 分子・診断病理学分野\*

【目的】大腸癌肝転移巣からの肝内進展様式を検討し、予後に与える影響および肝切離マージンの意義を解明する。

【方法】肝外病変随伴症例を除外した大腸癌肝転移切除91症例を対象とした。肝内進展様式を鑑別するために、血管内皮マーカー(CD34モノクローナル抗体)、リンパ管内皮マーカー(D2-40モノクローナル抗体)を用いて免疫組織化学染色を行った。21種類の臨床病理学的因子と予後との関連をretrospectiveに解析した。

【結果】血行性転移(門脈侵襲, 肝静脈侵襲, 肝類洞内侵襲), 非血行性転移(リンパ管侵襲, 胆管浸潤, グリソン鞘の非連続性間質浸潤)を各々51%, 27%の症例に認めた。主転移巣から微小転移巣までの距離の中央値は, 血行性転移2.5(分布: 0.2～24.8)mm, 非血行性転移2.2(0.15～

10.1)mmであり, 血行性転移巣の94%, 非血行性転移の99%は10mm未満の距離に存在した。肝切離マージン0mm, <10mm, ≥10mmの5生率は各々0%, 34%, 62%であり, 肝切離マージン≥10mmの予後は有意に良好であった( $P < 0.001$ , log rank test)。多変量解析(Cox proportional hazards regression model)では, 肝切離マージン( $P < 0.001$ )は有意な独立予後因子であった。Martingale residuals plot解析では肝切離マージンが広いほどハザード比は漸減した。

【結論】大腸癌肝転移に対する肝切離マージンは10mm以上の確保が望ましい。

## 2 肝細胞癌の局所療法後再発に対する肝切除の意義

坂田 純・白井 良夫・若井 俊文  
金子 和弘・永橋 昌幸・島山 勝義  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野

【目的】肝細胞癌の局所療法後再発に対する肝切除の妥当性を検討する。

【方法】局所療法後再発に対する肝切除13例, 初回肝切除175例を対象とした。

【成績】手術の危険度: 両群で手術時間( $P = 0.97$ ), 出血量( $P = 0.86$ ), 合併症( $P = 0.75$ ), 在院死亡( $P = 0.52$ )に差はなかった。無再発生存率: 局所療法後切除の成績は初回切除より不良であった( $P = 0.023$ )。多変量解析では局所療法は再発の独立危険因子であった( $P = 0.017$ )。生存率: 局所療法後切除の成績は初回切除と同等であった( $P = 0.600$ )。

【結論】肝細胞癌の局所療法後再発例においては切除後の再発率は高い。しかし, 局所療法後切除と初回切除とは危険度・予後において同等であり, 局所療法後再発に対する肝切除の実施は妥当である。